『椙大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』と『言語と表現―研究・作品集―』の創刊に寄せて

国際コミュニケーション学部の誕生（二〇〇三年四月）を記念して、またこの新しい学部の成長・発展を祈念して、この度、『椙大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』と『言語と表現―研究・作品集―』の二冊を創刊することとなった。

前者の『椙大国際コミュニケーション学部研究論集―言語と表現―』について、ここに一言、記しておきたい。

この雑誌は、学部の各教員が新しい学部にふさわしく自分自身の思索や研究を深めその成果を発表する場として構想されたものである。新学部開設にともないこの種の雑誌の刊行を開始するというのは、本学他学部においてのみならず、他大学においてもかなり一般的に行われていることのようである。学ばずして教えることはできず、新学部にふさわしいかたちで自分の思索や研究を深めてゆくことなしに新学部での教育の責任を全うすることはできないのであるから、いずれの学部・大学も新設時には、新学部の発展に寄与したい、寄与しなければという教員の意欲、義務感によって、またこのような意欲、責任感の高揚を期待して、この種の雑誌が創刊されることになるのであろう。この雑誌にしても今後、右のような意欲、責任感、義務感によって育てられてゆくのだと思う。

今回の創刊号には、さっそく七名の教員からの寄稿があった。そのうちの四名は、昨年十二月に開催された椙山フォーラムにおいて《表現・異文化・コミュニケーション》のテーマのもとで口頭発表を担当した教員である。これら四名の研究者はそれぞれ、古代日本文学の研究者（大浦）であったり、コミュニケーション学の構築を目指す研究者（笠原）であったり、社会学者（塚田）であったり、英文学者（岡田）であったりと、その研究領域は実に多様である。四名が右の共通テーマのもと、互いに他を意識しながら研究発表したのが昨年のフォーラムであった。司会者（小川）の手際のよさもあって、フォーラムは、聴衆のアンケートにもはっきりと浮かび上がるほどの大成功であった。この雑誌に掲載された論稿は、それぞれの研究者がフォーラムでの発表にさらに手を加えたものである。ほかにも、二編、ドイツ文学の研究（立川）とフランス思想研究の翻訳（藤江）が寄稿された。その結果、この雑誌には、さまざまな文化領域の研究者が一同に会するというわれわれの新学部の特質が十分に反映されることになった。

もとより文化、culture とは、どのような文化であれ、人間が、人間にとって異他的な荒地、荒涼とした荒地を耕す、cultivate するところに成立するものであり、それゆえ、いかなる文化にも必ず、荒地に対して自分自身を刻印してゆくという性格、つまり〈自己表現〉

の性格が具わっている。人間はこの五〇〇〇年くらいの間に地球上のあちこちで荒地を耕し多種多様な文化を作り上げてきた。そして現代、地球は、ありとあらゆる種類の文化によっておおいつくされてしまったかのような様相を呈している。しかし、まさにここに、現代の問題がある。地球が多種多様な文化によっておおわれるということは、特定のいかなる文化も、新しい荒地に包囲されているということでもある。現代を生きるわれわれは、この新しい荒地、〈異文化〉、あるいは他者と言ってもよいが、これとどのように〈コミュニケート〉し、つきあってゆけばよいのだろうか。多種多様な文化の共生は原理的に言ってはたして可能なのだろうか。この問題は、好むと好まざるとにかかわらず、現代を生きるわれわれに必ずつきまとう問題である。この問題はわれわれが知的にそれを問題として自覚するかしないかにかかわりなく、たとえば他人や社会や時代を前にしての漠然とした違和感や空虚感、あるいは不安、悲哀、孤独感といった感情の姿をとってすでにわれわれの生活を摑み取っている問題である。われわれ現代人はこの種の問題との格闘なしに自分自身の一日一日を深く耕し深く生きることはできないであろう。また、われわれの新しい学部、国際コミュニケーション学部の存在意義も、人類的な視点から見るなら、まさしくこの種の格闘にこそ存するのであろう。

この雑誌に掲載された論稿はすべて、それぞれ特定の専門領域での研究成果であるが、現代人を取り囲む文化状況の根本問題を念頭に置いた思考・研究の成果としての意義をもあわせ持っている。このことに思いを巡らすとき、寄稿された七点の文章のそれぞれが、またそれらが一冊の雑誌という場を共有しているというまさにこのことが、すでに、この雑誌の今後の展開の方向性を豊かに示唆し、さまざまな文化領域の研究者が一同に会するわれわれの学部の将来を拓く道筋を指し示しているような気がするのである。

願わくば、この研究論集が、国際コミュニケーション学部の教員一人一人を養う共通の糧とならんことを！

二〇〇四年三月三十一日

国際コミュニケーション学部　学部長　　北岡　崇